

## 佳作

### リンクの中で見つけた私 岩手県盛岡市立土淵中学校 3年 植津 愛花

みなさんは、何か自分の夢や目標はあるだろうか。スポーツでも、勉強でも、どんな小さなことでも構わない。心のどこかで「こうなりたい」と思えるものがあると、人はそこに向かって努力し続けられると、私は思う。私にも、ずっと追いかけてきた夢がある。うまくいかないこともあるけれど、それでも諦めずに続けてきたからこそ、今の自分があると思う。

私は、4歳のときからずっと、兄の影響でスピードスケートをやっている。スピードスケートとは、氷上のトラックを滑走し、定められた距離を最も速く滑走する時間を競うウインタースポーツだ。スピードスケートはとても難しい。何日か、何ヵ月か練習しただけで簡単にできるスポーツではない。技術的な側面では、片足でバランスを取りながら滑る「片足滑走」や、コーナーを曲がる際のバランス維持が、特に難しいとされている。また男子のトップクラスの選手は、およそ時速57キロメートルで滑走するため、高い筋力や持久力、そして優れたバランス感覚が求められる。私がスケートをしていて一番好きな瞬間は、とても緊張しているレース直前の静けさの中、ピストルの音を待つ時間だ。ピストルの音と一緒に氷をけり、全力で前へ進む。スピードに乗って、風を切るように滑っているときがとても気持ちがよくて好きだ。私はこの魅力ある競技、「スピードスケート」でオリンピック出場、そして「金メダル」をとることを目標としている。

私には、憧れている選手がいる。盛岡出身の吉田雪乃選手だ。彼女は、競技の中でみせる集中力や努力の姿勢はもちろん、日常生活全てにおいて妥協せず、自分を高め続けている「強い人」だと思う。そんな吉田選手のように、スピードスケートを通して得た強さを、私も自分の人生に生かしていきたいと考えている。

スピードスケートは、ただ速く滑れればいいという単純な競技ではない。スタートの一瞬の集中力、最後まで粘り強く滑る気持ちの強さが必要だ。スピードスケートの練習は厳しく、特に冬の早朝や夜に行われるリンクでの練習は、気温が氷点下になることもあり、手も足もかじかんで感覚がなくなることもあった。それでも自分に負けたくないという気持ちだけで、競技と向き合ってきた。

昨年の全国大会の直前、風邪を引いてしまい、体調が万全ではない状態で本

番に挑んだ。大会前は39度の発熱があり、棄権も考えた。そんな時、ふとこれまでの私が思い出された。毎日の練習がきつく、思わず泣きたくなることもあった。それでも「自分に負けたくない」という気持ちだけで、私は氷の上に立ち続けていた。だからこそ、今までの時間を、練習の成果を絶対に無駄にしたくないという気持ちが強かったのだ。幸運にも熱は下がり大会に臨むことができた。しかし、体が重くて思うように動けなかつたし、思い描いていたレースとはほど遠かった。もちろん結果は、納得いくものではなかったけれど、あのとき「もっと、もっと強くなりたい」と本気で自分に向き合うことができた。この14年間、スピードスケートを何度もやめたくなつたし、スケートが大嫌いになつたこともあった。でもやっぱりやめられなかつた。それはこの競技が、私の心の深いところに根を張つていたからだと思う。スピードスケートをしていなかつた自分を想像すると、今とは違う性格だつただろう。悔しさを乗り越える力も、地道に努力を続ける強さも、仲間と本気でぶつかる経験もなかつたかもしれない。私はスピードスケートを通して、「気持ちがある限り、人は変わらし、強くなれる」ということを学んでいる。これはスピードスケート以外でも、日常生活の中でもたくさん気づける機会はある。どんな小さいことでも今の時間を大切に成長していきたい。

私は、これからもきつい練習に挑み続ける。練習を大切に、一歩ずつ進んでいく。タイムや成績が全てではなく、日常生活から周りへの思いやりや礼儀を忘れずに過ごしていきたい。もっと速くなつて、もっと強くなつて、いつか必ずオリンピックの表彰台の一番上で自分の名前が呼ばれる瞬間をつかみたい。たとえ寒さや困難が待ち受けていても、私は逃げない。なぜなら、私は氷の上で自分の心の強さを知つたからだ。

今の私はまだ「夢の途中」だけれど、いつか「あの人のようにになりたい」と思われるような選手になりたい。そう願いながら、私は今日も前を向いて滑り続ける。

みなさんも自分の夢や日常の瞬間を大切にし、決して諦めずに前へ進み続けてほしい。夢や目標はきっとかなう信じて。